



心に響く人生の匠たち

「千人回峰」というタイトルは、比叡山の峰々を千日かけて駆け巡り、悟りを開く天台宗の荒行「千日回峰」から拝借したものです。千人の方々とお会いして、その哲学・行動の深淵に触れたいと願い、この連載を続けています。

大石修治

Shuji Ohishi

アートマネジメント 総合プロデューサー

音楽がなくても人は生きていける。 しかし音楽がない世界は心を疲弊させる



お客様を感動させ 楽しませるシナリオ

奥田 音楽の専門の方と会うと、気後れしてしまいます。こちらの底が浅くて。ご容赦ください。

大石 とんでもありません、よろしくおねがいいたします。

奥田 音楽に関していえば、2019年に千人回峰に登場していただいた元ソニー社長の出井伸之さんに勧められて以来、このヘッドフォンを愛用しています。すごくいい音です。Apple Musicの利用もその時からです。BCNを創業してから40年間、会社経営に忙殺されて私には音楽を鑑賞する余裕がなかったのですが、最近、経営から退きました。これでやっと音を楽しむことができるようになったので、インストールしている楽曲すべてを聴いてから寿命を全うしたいなと思っているのです。

大石 いいですね。しかし音楽は星の数ほどあっ

て一生かけても聴けないのが現実です。ぜひ、私がこれまでの音楽人生で溜めてきた『大石セレクション』の楽曲も聴いてください。これは、私が神奈川フィルハーモニー管弦楽団(以下神奈フィル)でプログラムの企画プロデュースをしている頃に、音楽監督でドイツの指揮者ハンス・マルティン・シュナイトさんや海外アーティストなどから教わったものなどです。「日本でまだ知られていない名曲はないか」と尋ねて紹介してもらい、音源を探し、吟味し納得したモノばかりですよ。(と言いながらおもむろに胸ポケットからメモ帳を取り出す)

奥田 びっしりと楽曲が書かれています。これは宝物ですね。大石さんは音楽を総合的にプロデュースするということですが、どれほどの知識がいるのでしょうか? どんな要素を入れながら、お客様が感動する曲を選ばれるのですか?

大石 音楽をつくって完成させるうえでは、楽曲 選びを含めて音楽の知識はもちろん必要ですが、 まず、音が命ですからオケの演奏力を高めることが 重要です。指揮者の選択や、コンサートマスター、 各パートの首席、演奏者一人ひとりのクオリティの 高さを維持革新することも大切です。

神奈フィルでは、クラシックだけでなく映画音楽やポップスも取り入れるなどして、お客様の層を広げてきました。時代の風を敏感に感じ取る能力をもっていなければ、お客様を楽しませ感動させることができないですね。

また、マネージメントとして、人、物、ソフト、資金、 情報、時間を総合的に束ね、集客して黒字を出せ る名人であれば企画は必ずヒットします。

奥田 これは実際に現場でやってこられたから出てくる言葉ですね。

大石 特にプログラムづくりは重要で、音楽専門 委員会を立ち上げて、外部の専門家にも入ってもらいました。お客様に喜んでいただける音楽づくりはどうすべきかといった意見を吸収し、好まれる曲のランキングを出して統計を取るなど、マーケティングも徹底してやりましたね。これは、前職のヤマ

 24
 Interview
 2022.6.20 mon vol.1927
 第3種郵便物認可



PROFILE 1946年2月、静岡県生まれ。ヤマハ広報部在任中から、大人の音楽文化向上を目指した『男たちのピアノパーティ』などの新しい音楽普及イベントをプロデュース。12年間にわたり、大人のピアノブームを演出して、当初は300人ほどだった生徒数を3万人規模へと全国に広める。仙台支店長、名古屋支店長を経てヤマハ横浜社長となり、各エリアで「地域密着の音楽文化創造」を展開して業績トップ。神奈川フィルハーモニー管弦楽団では12年間、専務理事として経営再建と演奏技術向上を実現。4億6000万円の基金を集め、最大5億円に達した債務超過と借入金を解消し、楽団を救う。子どもから大人まで「音楽文化創造」の現場最前線でプロデュース。日本オペラ振興会常務理事、横浜国立大学教育人間科学部講師、洗足学園音楽大学講師等を歴任。

構成/高谷治美 text by Harumi Takaya 撮影/長谷川博一 photo by Hirokazu Hasegawa 2022-4.11 /ニ子玉川のオーキッド・ミュージックサロンにて

ハでもコンサートなどを企画するときに「感動の種をまいて結果を出していく仕組みづくり」を最前線で経験してきたからできたことです。

奥田 商品設計ですね。

感動とはなにか 音とはなにか

奥田 ところで、大石さんのお好きな曲の中にマスカーニの歌劇『カヴァレリア・ルスティカーナ』が入っています。嬉しいですね。私も以前にこの曲の虜になっていましたから。どうして、あんないい曲ができるんでしょうかね。

大石 あれは作曲家が天からこのメロディを伝えられ、皆の心が美しく輝くように与えられて完成したのでしょうね。音楽というのは、感動して心が震え、人の心を豊かにする力を持っています。私もカヴァレリアは初めてしがみついた曲です。高校三年生のときの失恋で。

奥田 わかります、わかります。私も経験があるの で。ラジオで聴かれた? レコードですか?

大石 FM放送を聴いているときです。感動しましたね。癒やされながら、傷ついた心を正常に戻してくれました。

奥田 その感動ですが、よく活字では「心が震える」 なんて書きますが本当に心は震えますよね。

大石 どう感動したかは目に見えない世界ですが、 音は空気の振動で伝わるのでその波動を魂で受け 止め、琴線に触れるということでしょうか。そして、 感動が心を動かして心動し、行動へとポジティブな サイクルに繋がるのがいいですね。

奥田さんもその曲を素晴しいと感じたのですか 5、豊かな心と感性の持ち主です。

奥田 あの曲はたまりませんよ。大石さんにとっては 失恋の痛手から回復するクスリだったともいえますね。 大石 はい(笑)。このとき、音楽の素晴らしさに 目覚めたのかもしれません。アインシュタインも「音 楽がなくても人間は生きられる。しかし音楽がない 世界は人間の心を疲弊させる」と。

奥田 ところで、大石さんは神奈フィルの前のヤマハ時代が30年と長く、ここでも改革派でやってこられたそうですね。70年代~80年代は会社も元気でしたよね。あっちこっちに音楽教室があって。

大石 そうですね。ヤマハは楽器だけでなく多角的に事業を推し進めていました。会社が元気なころに私は入社して、5年くらいはホーム用品にいましたが当時の労働組合の委員長に声をかけられましてね。断ったのですが結局ダメでした。

奥田 労働組合に入られた?

大石 5年間専従しました。ところが、社長交代に 遭遇し、退任の真相究明をめぐる緊急労使会議な どで多忙を極めました。会社経営とトップ人事、権力と倫理などを探求した経験は今に繋がっています。

労働組合が浜松にあるので本社に行くでしょう。 するとメーカーとしてモノづくりが中心でした。本 来は音楽普及をして経営のバランスをとることが大 切なのです。

奥田 楽器を売る前に大切なことがあると。

大石 はい。ちょうどそのころ、1982年から3回ほどマザー・テレサが来日して上智大学で講演をしました。そのときに「心の飢えは豊かさの中の貧困」と語りましたが、日本はモノがあふれていて豊かですが、精神的に貧しいということですよ。

奥田 恥ずかしいですね。マザー・テレサはそれを 見抜いたようです。

大石 同じ頃、松下幸之助の文化に対する言葉も 教訓になりました。

「文化とは、宇宙万物の法則を解明し、生活に活かしていくこと」と。

奥田 そういう言葉に共鳴するようになったのは何 歳ごろですか?

大石 40代後半から50代前半でしょうね。実は私は55歳のときにカトリックで洗礼を受けました。人間の生き方について学ぼうとしていました。

奥田 55歳で洗礼とは。そこで人が変わられたみ たいですけれど、なにかあったのですか?

大石 私は音楽が好きで好きでたまらなくて、ヤマハに入社しました。しかし、組織は権力闘争などが渦巻いていて、労働組合でも苦悩する時期が長くなりました。

奥田 社長交代劇などが公になっていましたね。 大石 私は5年間の労働組合の任務を遂行した後、 広報部に異動して12年間在籍しました。こちらでも 理不尽や不条理に遭遇しましたが、一方では社会 に対して広報という立場からリスク管理を続けねば なりませんでした。

奥田 お上ではいろいろあったようですね。

大石 音楽普及活動をして改革しなければならなかったなかで、ついに不整脈で体が極限状態になってしまったんです。そのときに、何が正しいのか真理を求めて自分の中で答えが欲しいと思いました。そのためにカトリックの洗礼を受けようと考えたのです。

奥田 苦しかったでしょう。世の中、理不尽や不 条理と戦っている企業戦士はたくさんいます。

大石 私は根が一直線だとよく言われます。「正義とは、権力と倫理とは、人の道とは……」、そんなことを考えはじめたのです。さまざまな書物を読んだり深く学んだりするいい時期でした。まさに人生の分岐点です。

奥田 それは会社の分岐点にもなったのでは。

大石 そうだったかもしれません。私という人間は

音楽人生を物語る 『大石セレクション』



はじめはオーケストラ作りのために自 分の好きな曲をメモしていたが、海外の 指揮者や演奏家に「あなたの好きな楽曲 を教えて欲しい」と尋ねてはその音源を 探して聴いてリストにしていった。それ が積もり積もって一冊になっていった。

(注:虫眼鏡が必要なほど細かな文字でビッシリ 書かれています)

翻弄されながらも、それをバネにしてしまうようです。この組織の流れを変えないといけないのでは……と思いついたのが、働き過ぎの世の中のお父さんに向けて1994年に企画した『男たちのピアノパーティ』。これは12年間続き、大成功をおさめました。

奥田 さすがですね。どんな企画ですか?

大石 家に眠っているピアノを再び復活させることを考えました。ピアノを触ったこともない世の男性がピアノを3~4カ月習い、ステージに上がり家族や大勢に披露することを仕掛けました。

奥田 「ネコ踏んじゃった」でもいいよ、と?

大石 いえいえ、違うんです。皆すごいですよ。

奥田 そうですか。後編でこの『男たちのピアノパー ティ』についてもっと教えていただきましょう。 (つづく)

BCNは「ものづくりの環」を支え 育むメディア企業です



──「ものづくりの環」の詩 ──

ものを使う人がいます ものを売る人がいます ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます その意 (おもい) が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人―― 私たちは「ものづくりの環」のなかで すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN

http://www.bcn.co.jp/

※この記事は、BCN+Rの「千人回峰 (対談連載)」で公開中です。 https://www.bcnretail.com/hitoarite/

第3種郵便物認可 **2022.6.20 mon vol.1927** Weekly BCN Interview **25**